

1. 授業事例

Dr. Thomas Willich；“ブーヘンヴァルト記念碑”の授業記録

（2013年12月19日，John-Lennon-Gymnasium，第12学年，17～18歳）



(1) 事例紹介

ここで取りあげる授業は，トーマス・ヴィリッヒ（Dr. Thomas Willich）による歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」である。

ヴィリッヒは，ドイツのベルリン市にあるジョン・レノン・ギムナジウム（John-Lennon-Gymnasium）¹⁾の教師である。大学で中世史の研究に従事した後に教職に就き，10年以上の教職歴を経た現在，同校の歴史科の教科主任をつとめている。

彼は歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」を2013年12月19日に第12学年生²⁾を対象に実施した。この授業は，DDRによってブーヘンヴァルト強制収容所の記念施設（ヴァイマール近郊）に建てられた記念碑（フリッツ・クレーマー作）³⁾を題材とするものであり，90分の授業である。風邪の流行で約半数の生徒が欠席したため，出席の生徒数は9名であった。

(2) 授業展開

歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」は，1名の生徒がナチズム支配や抵抗運動に関するDDR期の見方などについて調べてきたことを発表した後に開始された。それ以降の教師と生徒の発言，資料等を日本語訳にて示す。録音状態が必ずしも芳しくなく，発言が聞き取れないところがあることを予めおことわりしておきたい。

なお，①～⑤の分節化は，観察者である服部によるものである。

①学習課題の確認

教師：それでは，ブーヘンヴァルトの記念碑や強制収容所について深く取り組んでいきたいと思います。……(略)
……私はこのテーマについてプリントを用意してきました。

【教師がプリントを配布する】

教師：プリントの上部にある中心課題を読んでください，そして，自分の言葉に直してみてください。

【生徒がプリント上部の中心課題(タイトル部分)を読む】

教師：ティム

生徒：僕はこう理解しましたー反ファシズムとヒトラー政権がDDRの建国の正当さであると。

教師：それは記念碑とどう関係している？

生徒：それは…

教師：その課題は記念碑に関してだよ。

教師："ブーヘンヴァルト記念碑―「DDRの正当化として石と化した[(石でつくられた)]反ファシズム表明」?"
…これはどう理解したらいいかな?これは美術史の本からの引用文です。「石と化した表明」,これは普
段の言葉でどう言ったらいいかな?

生徒：えっと,たぶんですが,正当化するものとして反ファシズムをこの記念碑で表現しているということだ
と思います。

教師：その通り。この記念碑は,DDRという自分の国を正当化するためにDDRで反ファシズムがどう理解さ
れ,どのように利用されていたかの象徴ですね。そうでしょう?そういったことで,命題の,今議論し
ている記念碑は,象徴です。…これから一緒に理解をどんどん深め,議論していき,そうして最後にこの
命題が合致しているのかどうかということを考えてみましょう。

<プリント>

ブーヘンヴァルト記念碑

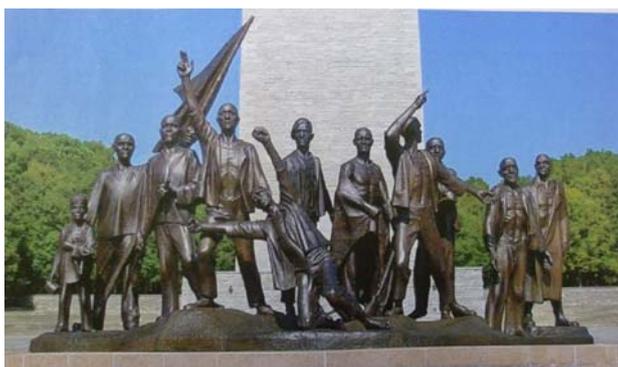
「DDRの正当化として石と化した反ファシズム表明」?

(エックハルト・ギレン『敵対する同胞 冷戦とドイツ芸術 1945~1990』,ボン,2009年,143頁)

1) ブーヘンヴァルト強制収容所とブーヘンヴァルト記念碑(フリッツ・クレーマー作)につ
いてのDDRの学校映画

1) 映画の中の解説者のどんな表現によってDDRのパースペクティブが特に明らかになりま
すか。その表現を書き留めなさい。

2) a) 映画からの情報により,記念碑の個々の像について写真に書き込んでメモを作りな
さい。b) 記念碑の表現意図とその「死にも狂いで戦い勝利へ」というモットーについて
解説しなさい。



写真：Naomi Tereza Salmon; <http://www.buchenwald.de> (14.12.2013)

②映画『ブーヘンヴァルト記念碑』の視聴による準備

教師：それに関して今日はある映画を用意しました。ブーヘンヴァルトの強制収容所と記念碑について教えるた
めに1960年頃につくられ,DDRの学校で見せた映画です。学校で見せるためだけに制作された映画で
す。君たちの最初の課題は,この映画を見ながら,映画の中の解説者が言っているどんなことが今ハンナ
が言ったこと,DDRによる反ファシズムや抵抗運動の扱いについて言ったこととマッチしているかメモ
することです。えー,つまり,反ファシストたちが強制収容所に収容されたという見解と結びつけて,こ
の映画の中でどういう表現に気がついたか。まずは簡単にメモを取って,その後でこの映画における見方

をつかんでいきます。【プリントの課題Ⅰ－1】

【教師が映画『ブーヘンヴァルト記念碑』を映写し、生徒が視聴する（13分弱）】

教師：きちんと作動するといいいんだけど…

《映画におけるナレーション》

ナチズムを根底から壊滅させることと平和で自由な新しい世界をつくることが私たちの目標である。……（聞き取れず）

3回にわたった大規模な処刑において、ナチス親衛隊は18カ国からの罪なき人々を処刑し埋めていった。

いろいろな場面のレリーフはこの収容所の歴史を示している。それらはファシストたちの非人間性と被収容者の苦しみを印象的に想起させる。

私たちは収容所の入口門にある皮肉な碑文を忘れない。拷問を受けた者の苦しみもドイツの最も暗鬱な年月をうみだしたのも忘れない。

56000人のドイツの最良な共産主義者と反ファシストたちがブーヘンヴァルトでナチス親衛隊の死刑執行人による犠牲者となった。

まだ火葬場の煙がでている間に、政治的な活動を行う被収容者のグループが収容所からの解放の準備をしていた。この行動の指揮は非合法の収容所委員会の手であり、それは様々な国の出身である経験豊かな共産主義者と反ファシストたちからなっていた。

1945年4月11日、とうとう被収容者たちが勝利を手にし、それによって収容所の処理をぎりぎりのところで阻止した。

ナチズムの時代に起こった出来事はけっして消し去られてはいけぬ。被収容者の苦しみは忘れられないことである。

多くの芸術家たちは心を打つ描写でそれを表現してきた。悲しみと訴えがそれらの芸術家たちによる描写の基本的なモチーフである。

フリッツ・クレーマー教授がつくったブーヘンヴァルト記念碑は、その他の警告碑をこえるものである。悲しみと訴えが中心を占めるのではなく、労働者階級の反ファシストたちの決断と連帯、そしてファシストに対する戦い、暴虐に対する人間性の勝利の確信が表現されている。

クレーマー教授はこう言った—私の目標は、何百万もの人々に私の作品を通して過去と根本的に取り組むためのきつかけや力を得てもらうことである。

誰がこの目標を達成できたか？どうやって達成できたのか？この長期にわたる創造の過程を振り返ってみよう。

この記念碑をつくるにあたり、その芸術家は多くの年月と労力を注いだ。数えきれないほど何度もつくりなおし、深く考えなおしてつくった構想が、ついに非常に有益な表現のできるものにできあがっていった。彼は全部で42体の像を形づくった。それぞれの仕草や表情を何度も新しくつくりなおして。根気強くつねに効果的な表現に努めてきたことから、社会的な課題を担った芸術家としての高い責任意識がうかがえる。

すでに最初の構想において、誓いをもった抵抗運動の闘士たちの一群が基本的なモチーフとして示されている。この8体の像の姿勢や仕草がファシズムの残虐な行為に対する被収容者の精神的な優越を表している。

しかしながら、強制収容所解放の共同行動とファシストに対する勝利の確信とがまだ十分に表現されるには至っていない。

クレーマー教授はまず最初にグラフィックによって、ブーヘンヴァルトの被収容者……（聞き取れず）……を表現しようと試みた。

彼はこう言った—個々の像において私は、人間集団をそれぞれに象徴する典型というものを演出しようとした。同じような環境のもと、その集団の認識の働きは、様々な反応をうんだのだ。

抵抗運動で亡くなった全ての同志の象徴が、転倒している人〔記念碑の真ん中〕の像である。防御するだけの人からクレーマーは闘士を露出させた。それは倒れそうになりつつも戦うシグナルとして両方の拳骨を上あげている。

その顔には道徳的な偉大さと人間的な立派さ、そして意味のある人生に関しての満足感が映し出されている。

この戦いによる犠牲者である転倒している人は、勝利を具現する誓っている人と構成上融合している。それは水平にのびた手で闘士たちに安定した土台をもたらしている。

誓っている人はこの記念碑における精神上のクライマックスである。誓っている人は、楔形の隊形による闘士たちの配置、それらを三角形に閉じ込める旗の線、そしてこの三角の構図の中に転倒している人を取り込むことにより、特

に強調されて表現されている。

自我をもち反撃できる姿勢で闘士たちの列に若い男児が立っている。収容所で体験したことにより、彼の表情は早熟した子どもらしくないものである。クレーマー教授はこの男児を記念碑の構想の最終版になって入れた。

彼は、グラフィック上の描写では早熟さを強調したが、立体化では特に子どもを表現している。それは自我をもち反撃できる姿勢で抵抗グループに同調し、守られつつも同等に注意を払っている。

この男児や全ての闘士たちの生涯をかけた活動や戦う決意とは対照的に、疑いをもつ人は諦めの状態にある。微動だにせず、その両手は、ぶら下がったままである。ファシズムの死の収容所が彼の肉体も精神も破壊したのだ。

彼は呼びかける人の手を取ることもできない。呼びかける人は政治的なアジテーターの類であり、わきに離れて立ち絶望し怯んでいる人を正しいことに誘い込もうとしつつけている。

彼は、ファシストの犠牲者であるが労働者階級の力を信じるこのできない冷笑する人にも働きかけている。

クレーマー教授は言った一信念をもった被収容者は自らを苦しめる人とだけでなく収容所の多くの諦めている人とも対決しなければならなかったということを私ははっきりさせたかった。疑いをもつ人も冷笑する人もブーヘンヴァルトの真実に欠かせないものである。彼らは闘士たちとは明らかに分けられる。それらの間には、確信をもてずまだ決断をさけながら、話しあう人が立っている。

自覚的な革命的反ファシストたちはこの数えきれないほどの被収容者の中で少数派であったが、彼らにこの芸術家は集中して力を注いだ。彼らがファシズムを崩壊させ新たな生を築く力を具現するからである。

このブーヘンヴァルト記念碑においてクレーマー教授は、歴史的な真実を表し心打つ芸術的な造形を通して、具体的にも一般的にも通用する人物たち、それらの社会的な関係と階級の力を目で見えるように、また体験できるようにした。

この芸術家が意図するように、この警告碑は、過去と取り組み、ファシズムによる個々のかたちの残虐行為とたたかい、永遠に平和の続く世界をつくりだすきっかけと力を、訪問者に与える。

(歌)

(授業記録音声より)

教師：学校用に制作された映画でした。何か質問は？…ハンナ

生徒：えーっと、ドイツの赤十字によって解放されたと本で読んだのですが、本当にこのような蜂起があったのですか？

教師：うん、いい質問だね…本当はドイツの赤十字じゃなくてアメリカ人によって解放されたんだ。

生徒：ああ、アメリカ人もその場にいたから…

教師：違う、そうではなくて、アメリカ軍ね。面白いことに、この映画では一言もそのことが出てこないんだ。

生徒：そうですか…

教師：こう言われてる…

生徒：抵抗運動は本当にあったんですか、それとも映画の中で誇張して言ってるんですか？

教師：うん、つまり…

生徒：つまり、アメリカ人によって解放されたけど、まあ被収容者もその前に抵抗運動をしていた…けど実際にはアメリカ人の手によって収容所は解放された…

教師：いや、えーっと…まだ今日においてもいろいろな説明がある。アメリカの記録によると、えー…被収容者が本当に収容所の中から門を開けたと書いてある。それでつまり、アメリカ軍がブーヘンヴァルトに到着した際にちょうど門が開いてアメリカ軍が門を通過して収容所に入ることができた。…えー、とはいつても、…私の知る限りでは、被収容者が全て自分たちの手で解放したわけではないといってる史料もある。アメリカ軍がブーヘンヴァルトに着いたちょうどその時に…もちろん収容所内で抵抗運動があったのは確かなことだけど…アメリカ軍が収容所内に入れるように関係者が開けたのではないとも言われている。興味深いことに、ここでは一言もアメリカ人のことは出てきません、それは本当にこの映画の中では重要とされていません…

生徒：察知されていたのですか、つまり解放について。

教師：えーっと…それは確かなことはわかりません。たぶん、そうだとするけど、そうだと思うけど、ちょっと確かなことはわからない。

教師：それでは〔映画の中の〕解説者の発言についてです。何か気がついたところ…DDRの見方をはっきりさせているところ。どんなことをメモしましたか？

生徒：えーっと、被収容者が…よくわからないけど…被収容者が道徳的な偉大さと人間的な卓越さを示していること、ファシズムの力が絶滅され、新たな生が築かれうることや築かれえたこと、またこの警告碑が過去と取り組んで永遠に平和の続く世界を築くための力を与えていること、そして、被収容者が自力で自分たちを解放したこと、フリッツ・クレーマー教授は記念碑を通してファシズムの勝利に対抗する被収容者の決意と連帯と自信というものを表したかったこと。

教師：うん、はい。おそらくそうだね。

生徒：…なんていうか、被収容者はその時代の最良の共産主義者たち、反ファシストたちであって、それで冷笑する人も力を得たというか…

教師：うん…うん。一部分で、被収容者のことを革命的な反ファシストという言い方をしているところもありました。この言い方は、つまり…反ファシズム…つまりナチズムに対して戦いを行っていた反ファシズムと共産主義とが同等になっている言い方です。革命的であることという主張を共産主義はもっているからね。…つまりここで使われているこの同等としての言い方、さきほどハンナが発言したことにも合うことですが、DDRの観点では、ほとんど共産主義者と共産主義の抵抗運動だけが重要であるとみなされている。DDRの後期に小さな変化があって…80年代でしょうか…シュタウフェンベルクのことを想い起こされ、あるいは例えば他の抵抗運動の誰かが想い起こされ、例えばシュタウフェンベルクの伝記がDDRではじめて出版市場にでたのです。そういうときにもフォーカスはいつも共産主義にありました。

③ブーヘンヴァルト記念碑の表現内容の解釈

教師：それでは次に、この記念碑について今いろいろと見聞きしてきましたが、詳細に注視してみましょう。今までに聞いたこと、もう一度写真を見てわかることをベースに、一つ一つの像について書いてみましょう。一つ一つの像が何を表しているのかメモしてみてください。最後にこの記念碑が表現しようとしている内容を、「死にもの狂いで戦い勝利へ」というこの記念碑のモットーも含めて解説してみてください。10分ほど時間をあげるのので、隣の人と相談してもいいです。その後で詳細にこの記念碑について考えていきましょう。【プリントの課題1-2】

【生徒が個々あるいは隣同士で解釈に取り組む（約7分半）】

教師：それでは、えーっと、記念碑について皆どんなことを書きましたか？どの像について確認できたでしょうか？ そうしたら、左から始めて、右に移っていきましょう…ダウシャ

生徒：えーっと、はい。初めに[向かって一番左に]この幼い男児がいて…その子について言ってもいいですか？…はい、それで、その男児は普通の子どもを映し出してるわけじゃなく、特徴的で、早熟な顔をしていて、それは人々が強制収容所において体験した出来事を物語っている。

教師：ちょっとその前にその男児についてだけど、どうしてかわかりますか、どうしてこの記念碑に子どもが…よりによって子どもがいるのか。

生徒：おそらく、こうだと思います、この芸術家はこの抵抗運動に結びつきのあるいろいろな社会階層を表現したかったわけで、ただ闘士たちだけを表現したかったわけではないというか…

教師：そうなんだ。その後のブーヘンヴァルトとも結びついていて、このことにはある大きな理由がある。まだ君たちに話していないが、もしかしたら知っている人もいるかもしれないけど、そうなんだ。

生徒：もしかして、子どもたちが大人と同等に考えられるということですか？ DDRでは大人と子どもは同等に考えられていたとか…

教師：そうではないね。これにはある理由があるのです。えーっと、ブーヘンヴァルトの収容所で一人の子どもが被収容者たちにかくまわれていたのです、それによりその子どもはアウシュビッツに運ばれることはなかったのです。それで、その子ども…えー…その子どもについての小説が書かれて、ブルーノ・アーピッツという作家によって、彼自身が被収容者の一人でした。この小説はDDRでは必読書で、有名な映画にもなって…この小説は映画化もされて、その子どもは「ブーヘンヴァルトの子ども」といわれ伝説的な存在になりました。DDRではその伝説的な子どもの存在を誰もが知っていたわけで、えー…この話は本当にあった話です。本当にあった話ということは確か、その子どもは今日ではもちろん年を取った男性だけど、まだ生きておられる。ただ、えー…この話はDDRで特に誇張されて伝説化された話だという説もあります。それから、例えば、この子どもの代わりに別の人が搬送されたということについて話題にされることはありませんでした。非難ではなくて、もちろん子どもの命を救ったのだから…でも、子どもをかくまっていた被収容者たちは、その子の代わりに別の誰かをブーヘンヴァルト行き、いやアウシュビッツ行きのリストに載せました。…このことを掘り下げるつもりはないけど、ブーヘンヴァルトとの関連でそ

の子どもがDDRでは特別な役割を演じていたということは言うておきます。

生徒：その小説はどのようなタイトルですか？

教師：『Nackt unter Wölfen』⁴⁾。ブルーノ・アーピッツが書いたもの。これは本当に読む価値のある小説で、映画も私にとってはとても良かった。ただ、えー…話の背景を知っていないと理解しがたいと思います、この子どもが伝説になったという背景を。

教師：さあ、次に進んでいこう。記念碑の群像の中には誰がいる？ エレナ

生徒：はい…旗を持つ人

教師：うん

生徒：そして…

教師：どういう意味なのかな？

生徒：…えーっと、まずこの男児を守るように…なんていうか…立って…、まっすぐ立っていて、左に旗を持っている。

教師：この旗を持つ人、何が重要で、何が変ですか？ブーヘンヴァルトの被収容者を描いた記念碑だよ。この旗を持って収容所を行進したの？これは何を表している？いったい、何の旗なのかな？

生徒：これは赤旗です

教師：そう、赤旗です。労働者階級の共産主義者の赤旗、いいかな？…

生徒：これは何ていうか、その芸術家も言っていた、誓っている人との組み合わせ、誓っている人はこれから[この解釈の一環で]出てくるでしょうけど、それとの組み合わせにより、関係する3人の人物の強さと勝利への決意を表しているのだと思いますが。

教師：そうだね、いいね？

生徒：なんか健康そうにも見えます。

教師：うん、それについてもこれから話題にする。それはすごく大事な観点です。…旗を持つ人の隣にいるのは誰かな？よく見てください。武器を持っている人がわかる。この人物はいつも武器を持って立っている…武器を持つ人という名前でもつけようか。そうしたら次に、ハンナが先ほど言っていたことだけれども、旗を持つ人と武器を持つ人、この二人は健康そうに見えて、よく見てみると他の人物にくらべて身なりがきちんとしている。これはどう説明できるだろうか？…一人は旗を持ち、もう一人は武器を持ち、二人とも身なりがきちんとしていて、まあたぶん、食べ物に困っているような感じもなく…この人たちは…はい？

生徒：たぶん、誰か…収容所の一人で、もしかしたら働いていた人かもしれないし、それかアメリカ人と一緒に収容所の解放のために攻めてきた人で、最終的にこの記念碑に入ることになった人…

教師：アメリカ人というのはすごくいいんだけど、DDRが1960年頃に、冷戦時代の真っ只中に、ブーヘンヴァルトの記念碑にアメリカの兵士と一緒に入れるかな？…誰を表しているんだろう？

生徒：ソビエトの兵士じゃないかな…

教師：そう！これはソビエトの兵士を表しているんです、赤軍。えー…ソビエトの兵士はブーヘンヴァルトの収容所の解放に何の関係もしていなかった。…しかしながら、この記念碑に組み込まれて、えー…赤軍の兵士たちは、共産主義の被収容者たちとともに前線に立っている、ということなんです。

生徒：えー…この、このソビエトの兵士たちはDDRで解放者というふうに見てられていますが、でも当時は集団強姦があったのでは？

教師：そうだね、そのことについては秘密にされていた。それについて話されることも情報が流れることもなかった。…1987年頃にDDRに、そのことが少しほめかされている本、歴史の本がありました。その当時のことを考えると、すごく勇気のある行為でした…その本が出版されたこと自体とても勇気のあることで、というかそのことについて少しでもほめかしているということが勇気のあることで、ただその他ではこのテーマはタブーでした。

教師：それでは次。武器を持つ人はソビエトの兵士だということがわかったけど、その隣には？

生徒：誓っている人…

教師：誓っている人。何を誓っている？…うん、誰か別の言い方はあるかな？

生徒：…いえ、手を挙げてません。

生徒：誓っている人はあらゆるかたちでのファシズムを完全に壊滅することを誓っている。その誓いはさらに続いていく…

教師：将来的によりよい社会を築いていくこととまとめられるね。…さあ、その後はどう？

生徒：……（聞き取れず）……背後で支えている。

教師：背後ってことを言っているのかな？

生徒：はい、そうです。

教師：うん、うん…えーこの帽子…誰か知ってるかな？傾いた帽子…

生徒：…軍隊の帽子ですか？

教師：そう、つまり えー…例えばスペイン戦争で使われたような被り物を思い出させる感じで…このベレー帽も手伝って象徴的に対フランコの戦争を思い出させる。

生徒：名前はあるんですか？この像の名前は？

教師：…聞いたことないな、知らないけど…わからないけど、帽子をかぶる人とでも言うておこうか。えーつと、続けていこう、その前の像は？

生徒：転倒しながらも両腕を怒ったように宙にあげている。

教師：つまり、倒れこんでいるけれども、それでもまだ好戦的である。…それでその先はどう？

生徒：えーつと、たぶん、…大殺戮を予想して、その像は覆いをかけている…と思うのですが

教師：何を？

生徒：覆い…

教師：でも、どういう感じに見える？よく見てみると？

生徒：うーん、それでも決意や強い意志が見える。

教師：そう、そうなんだ、決心していて、好戦的。その後は呼びかける人がくるね。さっきも言ったけど、呼びかける人はこの記念碑の中でどういった役割をもっているのかな？

生徒：疑いをもつ人をできるだけ勇気づけようとしている。

教師：映画の中でも言っていたけど、呼びかける人はアジテーター、革命のアジテーター。このアジテーターという言葉は…えー、当時、人々に政治宣伝をする際に使われた言葉で、えー…ということは、言葉を使って戦う人ってということだね。

教師：そうしたら、最も右側の2体の像を見ようか。…え？ちょっとよく見えないから確認できないね。え？ああ！話しあう人、オーケー、そうだね、うん。…そうだね、それも話にでてきたね。それでは、最も右側の2体の像は？…サラ

生徒：それは疑いをもつ人です。

教師：正解、これはこの戦いに疑いをもっている人。疑いながらシニカルに脇のほうから眺めて、何ていうか…自分はこの戦いに関与したくないと脇のほうに立って思ってる。どっちにしろすべて意味のないものだと思うているのです。

教師：それでは、君たちがこれ全体を見てみると、そして記念碑のモットー「死にもの狂いで戦い勝利へ」も一緒に考えてみるとどうだろうか、どういったことをこの記念碑は表していますか？この記念碑全体で。

生徒：えーつと、私がこの記念碑を見たとき、そして描写から感じたのですが、いろいろな階級の人を描いていて、そしていろんな年代層の人もでてきて、例えばこの小さな子がここにいることとか、…そして例えば転倒している人と冷笑している人は断念しているかとまずは思われるけれども、そして、えーつと…疑いをもつ人も。…それで、この記念碑のモットー「死にもの狂いで戦い勝利へ」というのにととも合っていると思う。というのも、この中の人々も何人かきっと亡くなっているわけで、例えば疑いをもつ人と冷笑している人、まあ転倒している人はもしかしたら生き残ったかもしれないけど、…（聞き取れず）…みんなが少しづつ力を合わせて、そして一緒にこの戦いに勝つことができた…私はそう感じたのですが。

教師：そう、その通りだね。勝利ということだけれど、どういった勝利を意味しているのかな？

生徒：ファシズムに対しての勝利を表していて、何と申すか、限りなき強さと勤勉さを強調していると思います。そうして先ほどマルクスが言ったように、過去のことを想起して平和への道を決心して進んでいくということ。また、犠牲者の連帯をわかりやすく表していて、マルクスが言ったようにいろんな集団を代表させて、ナチスに対する一致団結を表しているというか…

教師：そうだけれど、ダウシャが言ったように、この記念碑は対ファシズムの勝利と様々な人や集団の連帯を強調しているけれど、…それだけかな、この記念碑が意味しているものは。それはもちろんあっています、あっているんですけど、それだけでしょうか？

生徒：何と申すか、これを見ていると戦死〔英雄的死〕という言葉が想起されます。まあそれにつなげていいのかわかりませんが、えーつと、でもある程度似通ったところがあるというか…国のために死ぬっていう…

教師：今君はすごくいいことを言ったと思います。ここでは、英雄を表現する、英雄としての美しい姿を表現するという意図がある。そして君が今言ったように、この英雄たちはある特定の理念を支持するためにいる。

いったいどんな理念かわかりますか、このテーマに沿ったことで。

生徒：えーっと、この記念碑は明らかに反ファシズムとか共産主義の側に立っている…。えー…僕は思うのですが…一つの階級…労働者階級だけではなく労働者階級に共感している階級の人たちと、この戦いに参加しなかった人たちとに明確な境界があって、例えば疑いをもつ人や冷笑している人は一群から離れて脇のほうで立っていて…勝利を得るために戦った人たちと戦っていない人たちの境界が明らかになっている。

教師：うん、それはまさに共産主義の国だね。今皆の言ったことをまとめてみよう。ファシズムに対する英雄的な共産主義の戦い、この戦いは犠牲者も多かったが勝利を得ることができた戦いだ、と記念碑が表現している。しかしながら、私としては記念碑が言っていることはまだこれだけではないと思っています。先にハンナが言っていたことを思い起こし、そしてこの記念碑が 1958 年に建てられたということも考慮したとしたら、この記念碑はもう少し多くのことを語っていると思うのです。この記念碑はどんな戦いと結びつけられていると思うかな、この記念碑を全体、一つとして考えてみると。…反ファシズムの戦い、ここでは共産主義者が強調されているけれども。それは勝利を得ることができた戦いだとここで語られているね、記念碑はそれを表現していると。ただ、さらに間接的には何を意味しているのかな？どんな戦いがまた勝利を得る戦いだと？

生徒：資本主義に対する戦い、冷戦も。…どこを通して表現されている？

教師：えー、この記念碑のどこを通して表現されているかという問いは、正当な問いです。だけど、何というか、この記念碑の文脈から理解できるのだけど、"死にもの狂いで戦い勝利へ"というメッセージはすごく一般的な言い方です、ただのモデルのような。というのも、そこには、死のもの狂いで戦いナチズムに勝つとは書いていない、ただ"死にもの狂いで戦い勝利へ"とすごく一般的に書いてあるだけ。それで、このモットーはナチズムに対しての戦いにも関連づけることができたと同時に、西側に対しての戦い、資本主義に対しての戦い、具体的に言うと連邦共和国に対しての戦いにも関連づけることができた。つまり、この記念碑からは、DDRはブーヘンヴァルトの被収容者たちが戦ってきた戦いを続けていくということが導きだせたのです。…皆さん理解できましたか？いいですか？それから、えー…これもまた偶然ではないのですが、大きな敷地内にこの記念碑があるので、そこで公的な政治集会が行われたりします。そういうこともあり、DDRはこの戦いの伝統にたち、"死にもの狂いで戦い勝利へ"を我々は続行していくと言っているわけです。

④ブーヘンヴァルト記念碑がつくられた文脈や意図についての検討

教師：それでは、これをもう少し詳しく明らかにしていこう。[プリントの] 次の頁です。その頁に、DDRにおいての反ファシズムの機能に関する文章があります。今、それについていろいろと聞いてきたよね。これを読んで、DDRにとっての反ファシズムの機能を言っているところに下線を引いてみてください。つまり、反ファシズム [という言葉] はDDRでどういった機能をもっていましたか。【プリントの課題II-1】

【生徒がプリントの文章に取り組む（約5分半）】

〈プリント〉

II) DDRにおける反ファシズム

1) 次の表現から、DDRにおける反ファシズムの機能について掘みなさい。

反ファシズムによるDDRの建国神話（それが主として意味していることは、ナチズム政権に対する反ファシズムの戦いは共産主義者のみが断固として行ったものであり、この反ファシズムの戦いの目的はDDRの建国によって実現されたということ）は、一貫して、公的な記憶を意のままにする者たちの権力と支配のリソースであった。すなわち、簡潔に言うと、反ファシズムというものを意のままにする者には、それによって与えられた保護を反対派や気に入らない者から取り除く力もあった。この保護を取り除くことの極端なかたちが「ファシスト」や「ファシズム的」と呼ぶことで、それらはDDRの初期段階に非難のために恣意的に使われる言い方となった（1953年6月17日の蜂起を指す「ファシズム暴動」、ベルリンの壁を指す「反ファシズムの防壁」という言い方は、その例である）。反ファシズムによるDDRの建国神話はいつも統合と排除の二つの物語を取り揃えていて、また、ソ連占領地域ないしはDDRの支配体制において権力者だけがそれを意のままにできたわけで、フランスやイタリアでの反ファシズム的抵抗運動の神話とは違い、その建国神話のはつねに支配のための道具でもあった。（……）

DDRは全体としてまとまりがあり他の政治的構成体と全く異なるという、語りによる統合とアイデンティティの創出におけるその機能とならび、反ファシズムによる建国神話は、つねに国内におけるSEDにとっての支配の道具という働きももった。一般的にはいわゆる「ブルジョア的反対勢力」を「ファシズム的」として非

難できることにおいて、またとりわけ共産主義支配を前提に社会民主主義政党を1946年にKPDとの合併により強制的にSEDに統一させ屈服させることにおいて、反ファシズムによる建国神話は支配の道具という働きをもった。差し当たっては、この反ファシズムによる抵抗運動の神話により、労働者階級はナチ党の側にまわることはなかった、あるいはナチスのスローガンに冒されやすかったただけとして、労働者階級の疑いを晴らすことに重きがあった。ナチ党は明らかにドイツの労働者たちに頼り、国際主義的社会主義に対抗して国家社会主義を政治上のスローガンや指導理念としていただけに、そのことは特に必要なことであった。

Manfred Agethen/Eckhard Jesse/Ehrhart Neubert (Hrsg.): Der missbrauchte Antifaschismus. DDR-Staatsdoktrin und Lebenslüge der deutschen Linken, Freiburg 2002, S.81f., 87f., 92f. <http://www.kas.de/wf/de/33.700> (14.12.2013)

2) 次の1960年のDDRのポスターが意図している効果を掴みなさい。



最後に、ブーヘンヴァルト記念碑についての中心課題に関してディスカッションしましょう。

出典：http://www.dhm.de/ausstellungen/mythen-der-nationen/eng/popus/DDR_11.htm (14.12.2013)

【教師が「DDRにおける反ファシズムの機能」と板書する】

教師：それでは、誰か個々の機能について説明できますか？…ハンナ、前に来てボードに書いて説明してください。

生徒：【生徒が「支配の道具」と板書する】

はい、反ファシズムは「支配の道具」として利用されていました。これはほとんどいつも上のほうから指定されて、誰が反ファシズムなのか、そうでないのかがわかるように、コントロールできるようになっていました。

教師：それは…えー、そうだね…何か一つ例を挙げて説明できますか、どういうふうに機能していたかっていう例を。

生徒：文章を読んで… 何というか…反ファシズム的というものがDDRに敵対したものに使われていたと理解したのですが…

教師：ファシストでしょ？

生徒：ああ、ファシストです。

教師：例えば…

生徒：もしかしたら、ベルリンの壁が「反ファシズムの防壁」ってことですか？

教師：この文章で他に挙げられているものでは、1953年6月17日のDDRにおける蜂起が「ファシズム暴動」と言われていたね。

生徒：全ての条件の中…（聞き取れず）…

教師：そうだね、つまりDDRに敵対する者は簡単にファシストであると非難されてしまった。…よろしい、ありがとう。えーと…他に…他の機能としては？

生徒：えーと、語りという意味はわからないのですが、この「語りによる統合とアイデンティティの創出」。

教師：語りとは物語ることです。でもここで重要な言葉はアイデンティティの創出です。これをどう理解すべきかを皆に説明してくれるかな？

生徒：【生徒が「アイデンティティの創出」と板書する】

うーん、「支配の道具」との大きな違いはわかりませんが。たぶん、例えばこの文章にも書いてあるように、この言いまわし、ファシズム、反ファシズム…ファシズムという言いまわしは恣意的に使われていた、そして共産主義のアイデンティティは反ファシズムであることでできあがっている、そう理解することができました。

教師：つまりDDRのアイデンティティということ？

生徒：はい、はい。

教師：そうだね。

生徒：えーと、つまり反ファシズムというのは、DDR、もしくはDDRの国民の中でアイデンティティとして働いていた、と考えます。

教師：ところで、それは1989年までは比較的うまく機能していました。人々…多くの人々は、我々は連邦共和国とくらべて、この国をとて徹底した反ファシズムの国として受け入れるという考え方でした。…えー…我々は反ファシズム的であるというこのアイデンティティは、とても効果的なプロパガンダでした。例えば、青年の育成においては、それはすごく大きな役割を果たしていました。…私自身もDDRで育ちました。それで覚えていることですが、青年ピオニール団員になったのが、エルンスト・テールマンが逮捕される前に参加した、KPDの最後の違法集会が行われた集会場所であったんです。まだ2年生くらいだったと思います。それはつねに"我々はこの反ファシズムの戦いを続けていく、我々は反ファシズムの国そのものである"というメッセージと結びついていました。すごく大きな役割を果たしていたのが反ファシズムによるアイデンティティです。…ハンナ

生徒：以前ナチズムの重要なポジションにいた人たちがDDRができた後にまだたくさん国内にいたと思うのですが、90年代頃だったかにそれについて本が出されたと聞いています。

教師：うん

生徒：どんな反応があったのですか、[DDRの]自己理解に関して。

教師：その後でということ？

生徒：はい

教師：ああ、それはもちろん多くの人にとって悪夢のようでした、DDRが…DDRもナチ党やナチストの支配機構の人たちを引き継いだということは。そのことは本当に、今まで習ってきたことと合っていなかった。例えば、1980年にはDDRのリーダーになっていたホーネッカーが大体10年の間刑務所に入っていたことがあるのも確かなことで、政治宣伝のポスター…反ファシズムのポスターの密輸のせいです。つまり、それでDDRでは、国家指導者自身が強制収容所に入っていたことがあるというのは周知のことでした。

生徒：私の両親も話してくれたのですが、両親がまだ小さかった時は、テールマンはヒーローのような存在だったそうです。母は彼が具体的に何をしたかは知らないけれど、いい人であると話してくれました。

教師：そうそう、テールマンについてのすごい政治宣伝の映画があって、テールマンはDDRではあだ名で"テディー"と呼ばれていて、DDR国内では"テディー"といえば熊のことではなくエルンスト・テールマンを指すということは皆が知っていました。彼の娘は各地をまわって、学校でも、父親のことを講演していたんだけど、英雄崇拜という感じでした。そうそう、この像、一人だけ手を挙げて立っているこの像は、エルンスト・テールマンも想起させます。

生徒：まだDDRが存在していた頃に、ソビエトの強制労働収容所で論争のようなものがあったのですか？

教師：それはないものとして、存在しないものとして扱われていました。強制労働収容所についての情報は全くなかったといってもよいくらいでした。ゴルバチョフの指揮のもとにグラスノスチが行われて、ソビエトの報道で、それについて書かれた新聞記事が出はじめて、それでもそういった新聞記事はDDRでは禁止されていて…私は例えば、ソビエトの新聞記事を家族に調達してもらいました。そう叔母が新聞記事を持ってきてくれました。全く馬鹿みたいなことでした、本当に。

教師：それはともかく、アイデンティティのところ。あと少なくとも1つか2つは挙げなければなりません。…例えば、「反ファシズムの防壁」というベルリンの壁の言い方にはどういった機能が現れていますか？

生徒：反ファシズムによる抵抗運動？

教師：誰に対して？

生徒：ファシズム。

教師：それはどこにいるの？

生徒：壁の外側。

教師：そう、西ベルリンだよ。西ベルリンにおそらくファシストと言われる人たちがいて、そのためにDDRは、ファシストがDDRを襲わないように壁、反ファシズムの防壁をたてた。だとすると、この反ファシズムという言いまわしはいわゆる敵方の者とか敵になりうる者と境界線をひくという機能をもっている。いいかな？つまり、外側の敵方や敵になりうる者たちとの間に境界をつくるという意味で、防壁なのです。

【教師が「外側の“敵”（連邦共和国）との境界づけ」と板書する】

教師：そういうことで、西ドイツとの特別な境界があるわけです。いいかな？我々は反ファシズムの国であり、ボンにいるファシストたちから距離をとっていると言いたいわけです。

教師：えー、もう一つの機能で実際のこととはかけ離れているものがあります…それはここでは「建国神話」と言われています。

【教師が「建国神話」と板書する】

教師：これはどういう意味だと理解できますか。DDRの建国神話としての反ファシズム？

生徒：ラルフが言ったように、DDRにおける正義のことです。

教師：うん。

生徒：反ファシズムのためにということ…

教師：つまり建国が正義だとすること？

生徒：そう、正当化ということ…

教師：うん…うん。

生徒：つまり、DDRの建国はファシズムに対する戦いの最後の一步だった。

教師：そうだね、正当化ね。

【教師が「建国神話」につづけて「DDRの存続の正当化」と板書する】

教師：…ちょっと読みづらいかな…反ファシズムの戦いを続けていくことの正当化、反ファシズムの戦いを続けていくDDRの正当化。DDRというのは、この反ファシズムによる抵抗の戦いから生まれたと理解されていたのです。

教師：これは…えーっと…かなり誤っていて、例えば、強制収容所にいた多くの被収容者、強制収容所にいた共産主義者の被収容者もその後、ソビエトの強制収容所とかDDRの刑務所に入れられたことがあったのです。…えー、なぜかという、この反ファシズムというものは同時に支配する道具であり、もし誰か気に入らない人がいた場合、その人は刑務所に入れられた。仮にその人が以前は反ファシストであったとしても。

生徒：…何を言いたかったか忘れてしまいました…

教師：後で思い出したら言ってください。

生徒：…ああ、今思い出しました。えーっと、損害賠償のような支払いはあったのでしょうか？保護があったと言っていたので…80年代かいつかわからないけど支払いが…DDRで…

教師：うんうん、連邦共和国では支払いがありました。…優遇措置みたいなものはナチスに迫害された犠牲者たちにあった…私の知るところでは、一定の優遇措置はあったけど、犠牲者への支払いはなかった。

生徒：誰が犠牲者として扱われたのですか？ 本当に全ての犠牲者、性的犠牲者もですか？

教師：いいえ、それはえーっと…強制収容所にいたという証明ができた人です。

教師：それでは、この[プリントの]ポスターを見てみましょう。この記念碑が写っていますが、ポスターの下方に、「反ファシストたちが戦って得ようとしたものはDDRで現実になっている」と書いてあります。このポスターではどういった効果が意図されていたのでしょうか？【プリントの課題Ⅱ-2】

生徒：全ての反ファシストは共産主義者であり、そのことによってDDRは共産主義国家であるのであり、従って完璧な反ファシズムなのであるということ…

教師：はい。基本的に…アイデンティティの創出についてだったけど、いいかな、えーそれで、建国神話でも、DDRを…反ファシストたちの戦いが実現したということ。…そのことでさらに反ファシズムの抵抗運動の見方が狭められる。…もちろん、えー…例えばショル兄妹の抵抗運動を共産主義と見るのではなく、共産主義者の抵抗運動だけが反ファシズムであるという見方になっていった。

生徒：…結構似ているというか…個人的に思うのですが…ショル兄妹の話は西ドイツでも結構複雑な役割をもっているというか…例えば反ファシズムの抵抗運動という話になると、一番初めにショル兄妹の話が出てきて、…公の場では、授業ではそんなこともないですが…公の場ではシュタウフェンベルクやショル兄妹の話が出てきて、共産主義者の抵抗運動とかは全く大きな意味をもたないと思います。

教師：君の言う通りです。それは20年か30年前は全く話題にならないテーマでしたが、現在はかなり異なっています。例えば、[ベルリンの]ドイツ抵抗運動記念館ではたくさんの抵抗運動が紹介されています。けれども、君の言う通り、公のメディアなどでは、今、特にシュタウフェンベルクやショル兄妹が中心になっている。ただ、もちろん、ローゼンシュトラッセについての映画とか、ユダヤ人についての映画とか、他にも非常にたくさんのものがあり、DDRでは全く違っていた…そういった事柄は私たちの耳にけっして入らなかった…いいかな？えー、そういった意味でも、今、連邦共和国で違う状態になった、全然違う、

いいかな。

[板書]

DDRにおける反ファシズムの機能

- －支配の道具
- －アイデンティティの創出
- －外側の"敵" (連邦共和国) との境界づけ
- －建国神話／DDRの存続の正当化

⑤学習課題の解決

教師：最後に、[プリントのはじめの] 中心課題にいこう。この記念碑について皆どう考えますか？「DDRの正当化として石と化した反ファシズム表明」でいいですか？

生徒：私たちが今日の授業の中でやってきたこと全てを考えると、私は明らかに「はい」と答えたいです。個々の人が一群となって…それがDDRのイデオロギーを表しているのだから、「石と化した表明」で合っていると思います。そうでないとしたら驚きです。(生徒の笑い)

教師：うん…ということは、皆が今日、この記念碑を見た時、またDDRの時代からある他の記念碑を見た時に、その記念碑がつけられた時点でどういった意図がねらわれていたのかということも一緒に考えないといけないということです。それは今日考えられることと全くかけ離れている場合がある。私は個人的には、記念碑を取り壊すということについては反対なんだ。記念碑が元々どういったことを表そうとするものだったのかを知ることが必要だし、そのうえで新たな見方をつくりだしていくことが必要だという意見です。…そうです…そして…すごく価値があり大事だと考えます、記念碑の観察においてそのことに注意を払うということは。

生徒：ただ、心許ないのは…ブーヘンヴァルトでその記念碑の前に立ったとして…もちろん、そこへ行って、それで記念碑について情報を得ないといけないですが、それはそうなのですが、でも、私が記念碑の前に立ったとして、そうして記念碑がつけられるときには他の働きがあるということを実際に前提にして観察するという、このことです。そこにどういったことが書かれているかはわからないけれど。

教師：うーん、どうなっているかわからないけど、おそらく何かそこに説明があると思います、えー…慎重な物言いをすれば、今その場においてどんなふうに説明が整えられているかはわからないけど。

生徒：でも、記念碑はつねに何かの理由があってつけられ、記念碑の背後には特定の意図があるということは、全てのそういった記念碑にあてはまる重要なポイントだと考えます。

教師：マーレンが言ったことは同時に悲しみの記憶の場のことでもあると思うんだけど、でも今それがどういった感じになっているかについては私は確信がありません。…

生徒：(聞き取れず)

教師：よろしい、皆、ありがとう。私たちはまた明日、成績表の受け渡しのときに会いましょう。

2. 歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」の特色

ヴィリッヒの歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」には大きく3つの特色を見出すことができる。

第1の特色は、過去につくられた記念碑を主たる学習対象として取りあげていることである。

この授業の学習対象は、ブーヘンヴァルト記念碑である。DDRにおいて1958年につくられた記念碑がこの授業の主要な学習対象である。これは強制収容所の解放やナチスに対する抵抗運動に関するDDRならではの独自の視点に基づく一種の語りであり、ナチズム支配とその崩壊という過去についてのDDRにおける取り扱いを表す史料である。

社会における過去の取り扱いについて取りあげる学習⁵⁾として、過去の社会における取り扱いについて取りあげる学習、現在の社会における取り扱いについて取りあげる学習、また、過去の社会における取り扱いと現在の社会における取り扱いをあわせて取りあげる学習が可能であろう。ヴィリッヒも授業後のインタビューにおいて、自身の歴史授業で過去につくられた記念碑などを取りあげることもあるし、過去の事柄について扱った現在の芸術やメディア、映画などを取りあげることもあると語っている。歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」の場合は、

かつて東西分断期に建てられたブーヘンヴァルト記念碑が取りあげられ、過去のDDRにおける取り扱いについての学習が意図されている。この記念碑という史料は、それをうみだした当時のDDRに迫るための素材として取りあげられている。

第2の特色は、記念碑についての分析を中心とする課題解決的な過程として構成されていることである。この「ブーヘンヴァルト記念碑」では、5つの局面によって学習が展開されている。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①学習課題の把握—ブーヘンヴァルト記念碑は「DDRの正当化として石と化した反ファシズム表明」か？②教育映画『ブーヘンヴァルト記念碑』の視聴による準備③ブーヘンヴァルト記念碑の表現内容の解釈④ブーヘンヴァルト記念碑がつくられた文脈や意図についての検討⑤学習課題の解決—ブーヘンヴァルト記念碑は「DDRの正当化として石と化した反ファシズム表明」か？ |
|--|

①では、ブーヘンヴァルト記念碑は「DDRの正当化として石と化した〔石でつくられた〕反ファシズム表明」かという教師によって提示された学習課題を生徒が把握する。②では、生徒はブーヘンヴァルト記念碑に関する当時の教育映画を視聴し、解釈を行うための手がかりを得る。③では、そのような準備を踏まえ、生徒が個々あるいはペア活動でブーヘンヴァルト記念碑の各々の構成要素とそれらの全体の解釈に取り組んだ後、教師の指導の下にクラス全体で記念碑の表現内容を読み解く。ナチズム支配に対する共産主義に基づいた反ファシズム闘争の勝利という直接的に表そうとしているもの、また西側資本主義陣営とりわけドイツ連邦共和国に対する共産主義に基づいた反ファシズム闘争の続行の決意という間接的に表そうとしているものをとらえる。さらに④では、参考資料をもとにDDRにおける反ファシズム概念の恣意的利用について掴み、それに基づいてブーヘンヴァルト記念碑の利用による政治宣伝のポスターを解釈する。これらを通じて、この記念碑がDDRでつくられた大きな文脈や意図を考える。そして最後に⑤では、①で把握した学習課題の解決を確認する。このように教師の指導の下、生徒は学習課題を追究し、それを通してブーヘンヴァルト記念碑という史料について批判的に分析し、記念碑が表現しているもの、そのような記念碑をうみだしたものを探っていく。ブーヘンヴァルト記念碑の分析に取り組む一連の課題解決的な過程として授業がすすめられている。

ヴィリッヒは、この授業に限らず、普段より、授業において中心となる問いを設定すること、生徒自身が問いに取り組んで考察できるようにすることを重んじているという。そういった歴史授業の考えからすれば、④でのポスターの解釈などは本来であれば生徒にじっくり取り組ませたかったところであろうが、時間の関係で先を急ぐことになったのであろう。

第3の特色は、学習内容において、過去の取り扱いと社会の有り様を結びついたものとして学ばせようとしていることである。

この授業では、ブーヘンヴァルト記念碑を切り口にし、東西分断期にイデオロギーによって歴史を都合よくつくり利用することで自国の建国・存続を正当化し国民を教化・統治しようとしたDDRの支配に迫らせる。当時の記念碑を事例にし、それに基づいてDDRの学習に取り組ませている。過去の取り扱いと社会とは相互形成的ともいべき相即的な関係にあり、そのような関係に着目させることによって過去の取り扱いにDDRの本質を見取らせようとしている⁶⁾。そうしてDDRについての認識をより深められるようにし、記念碑への熟考的な対し方も生徒に促している。

ヴィリッヒはインタビューにおいて、歴史というものはいろいろな見方考え方でつくられうるものであり、したがって既成の歴史の吟味や歴史の新たな構成を批判的に行えるように生徒を育てることを歴史授業で重視していると述べている⁷⁾。この「ブーヘンヴァルト記念碑」は、過去において特定の見方考え方に従ってつくられた記念碑を取りあげ、その記念碑を分析させることにより、既成の歴史への向きあい方を育もうとするとともに、直近の過去であるDDRについてとらえる歴史認識づくりを後押ししようとしたものといえる⁸⁾。

このようにヴィリッヒの歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」は、過去の記念碑という史料を取りあげ、その分析を中心とする課題解決的な過程を通して、当時における過去の取り扱いと結びついた社会に迫るものである。その時々における過去の取り扱いを表すものは記念碑の他にもあり、この授業はそれらの活用に基づく多様な歴史授業の可能性を示唆しているといえよう。

註

1) ジョン・レノン・ギムナジウムは、第7学年から第12学年までの中等教育一貫校であり、旧東ベルリン地域に位置する。DDR時代は総合技術上級学校であったが、東西統合後にギムナジウムとなった。同校のホームページは、



ジョン・レノン・ギムナジウム (2013年12月19日, 服部撮影)

- 2) ベルリン市のギムナジウム上級段階(第11・12学年)の歴史科では、1「古代・中世における近代的世界の基礎づけ」、2「初期近代から19世紀までの社会・国家における近代諸構造の形成」、3「近代的世界とその危機—民主制と独裁制」、4「1945年以後の二極世界」という主題分野が必修である。Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Sport Berlin / Ministerium für Bildung, Jugend und Sport des Landes Brandenburg, *Rahmenlehrplan für die gymnasiale Oberstufe Geschichte*, Berlin, 2006, S.20-27.
- 3) ナチスによって1937年につくられたブーヘンヴァルト強制収容所では、1945年4月の解放までに5万人以上が殺害された。後にDDRで英雄視されることになるドイツ共産党のエルンスト・テールマンもこの強制収容所で殺害された。この歴史授業で取り扱うフリッツ・クレーマー作の記念碑は、1958年にDDRによって設置されたものであり、切手やポスターやコインなどでも用いられ、DDRでは重要視された。ブーヘンヴァルトの強制収容所および記念碑については、松本彰『記念碑に刻まれたドイツ』、東京大学出版会、2012年、pp.200-204、他、参照。
- 4) この映画は、原作がブルーノ・アーピッツ、監督がフランク・バイヤーで、1963年にDDRにおいて制作された。邦題は『裸で狼の群れのなかに』である。
- 5) 社会における過去の取り扱いの有り様は、ドイツでは「歴史文化(Geschichtskultur)」と呼ばれている。同国諸州では近年、「歴史文化」が歴史教育の内容として取り込まれるようになりつつある。「歴史文化」については、例えば、以下のものを参照。Hans-Jürgen Pandel, *Geschichtsdidaktik*, Wochenschau Verlag, 2012, Hans-Jürgen Pandel, *Geschichtskultur*, in: U.Mayer, H.-J.Pandel, G.Schneider, B.Schönemann (Hrsg.), *Wörterbuch Geschichtsdidaktik*, 3.Aufl., Wochenschau Verlag, 2014, S.86-87, Dietmar von Reeken, *Geschichtskultur im Geschichtsunterricht*, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 55, 2004, S.233-240, Bernd Schönemann, *Geschichtsdidaktik, Geschichtskultur, Geschichtswissenschaft*, in: H.Günther-Arndt (Hrsg.), *Geschichtsdidaktik Praxishandbuch für die Sekundarstufe I und II*, Cornelsen, 2003, S.11-22.
- 6) 記念碑における過去の取り扱いの有り様に当時の社会の本質を見取らせることは、生徒の歴史認識を深めさせ、また記念碑への熟考的な対し方を促すと同時に、現在の社会における過去の取り扱いの有り様や在り方を改めて問うように生徒を促しうる可能性をもっている。現に、この「ブーヘンヴァルト記念碑」では局面④の終盤、ナチスに対する抵抗運動についてのドイツにおける取り扱いの現状に関して、一人の生徒が自発的に発言している。この授業ではそれをあえて掘り下げることはしなかったものの、通時的な対比によって現在における取り扱いを分析検討する学習へと展開させることも目標次第では可能であろう。
- 7) このような考えは、ベルリン市の歴史科の学習指導要領において重んじられているものでもある。Senatsverwaltung für Bildung, Jugend und Sport Berlin / Ministerium für Bildung, Jugend und Sport des Landes Brandenburg, *Rahmenlehrplan für die gymnasiale Oberstufe Geschichte*, Berlin, 2006, S.9-12.
- 8) 東西ドイツの統合から約四半世紀が経った今日、ナチズム支配とその崩壊という過去についての取り扱いの有り様を対象化させ、そこにDDRの本質を見取らせようとする歴史授業「ブーヘンヴァルト記念碑」は、ドイツの歴史教育においてDDRという直近の過去がどのように取り扱われているかという点でも興味深いものである。尤も、ヴィリッヒのこの歴史授業はあくまでも一例であり、DDRについての彼の授業にとっても一部でしかないし、ギムナジウムの上級段階という後期中等教育段階の授業であることにも注意を払う必要がある。
なお、2000年頃までのドイツの歴史教育における東ドイツ像の変容について考察している論考として、近藤孝弘「統一ドイツの歴史教育における東ドイツ像の変容—新連邦州の歴史教科書を手がかりに」、『名古屋大学大学院教

育発達科学研究科紀要（教育科学）』第49巻第2号，2003年がある。

《授業収集に協力くださったジョン・レノン・ギムナジウムのトーマス・ヴィリッヒ氏に厚くお礼申し上げます。
また，逐語記録の作成にご助力いただいた方々に感謝致します。》